

決算書の学びはじめに



財務会計の イロハのイ

財務会計のイロハのイ

コラムまとめ Vol.1

＜決算書基礎・貸借対照表 編＞

株式会社 帝国データバンク

はじめに

初心者向けシリーズ「財務会計のイロハのイ」は、財務の基礎から決算書を学びたい人や、教える立場にある人におすすめです。ワンエピソードがコンパクトな初心者向けシリーズとなっており、エピソードごとに＜ポイントの整理＞をしていますので、財務初心者の方でも安心して学習いただけます。

先輩社員と新入社員の2人が主人公です。先輩社員のレクチャーのもと、日々財務に関する知識を吸収する新入社員とともに財務会計の基礎を固めていきましょう。

資料は3部構成で、Vol.1には「決算書基礎編」と「貸借対照表編」、Vol.2には「損益計算書編」と「財務分析基礎編」、Vol.3には「キャッシュフロー計算書編」と「決算書応用編」を収録しています。ご自身の理解度に合わせ、ポイントを絞っての学習も効果的です。是非ご活用ください。

目次

～決算書基礎 編～	2
#01：決算書とは？	2
#02：損益計算書と貸借対照表	4
～貸借対照表 編～	6
#03：貸借対照表の構造 前編（資産の部）	6
#04：貸借対照表の構造 後編（負債の部・純資産の部）	8
#05：流動資産 前編（当座資産）	10
#06：流動資産 後編（棚卸資産）	12
#07：固定資産 前編（有形固定資産）	14
#08：固定資産 中編（無形固定資産）	16
#09：固定資産 後編（投資その他の資産）	18
#10：繰延資産	20
#11：負債の部 前編	22
#12：負債の部 後編	24
#13：純資産の部 前編	26
#14：純資産の部 後編	28

～決算書基礎 編～

#01：決算書とは？

先輩社員：さて、本日から教育担当になりましたので、今日から少しずつ仕事を教えていきますね。あわせて知っておいてもらいたい知識として財務会計の基礎をお話ししていきます。知っていることもあるかもしれませんが、一歩ずつ着実に進んでいきましょう。

新入社員：ありがとうございます。学生時代は歴史を専攻していたので、会計や財務の知識はほぼ素人ですが、一日でも早く戦力になれるように頑張ります！

先輩社員：では早速、決算書と聞いてどんなイメージを浮かべますか？

新入社員：そうですね。経営者や投資家が見ている難しい資料という印象です。チラッと見たことがありますが、漢字や数字が大量に並んでいて、読み解くには相当勉強しなければならないんだろうな、と思いました。

先輩社員：そうですね。初見では抵抗感があるかもしれません。ですが、決算書は平たく言ってしまうと会社の成績表といったところです。

新入社員：成績表ですか。なんだか学校を思い出して、急に親近感が湧いてきました。ということは、その会社の得意な分野や苦手な分野がわかるんですか？

先輩社員：その通り。ただ、ある程度の知識がないと、それを見つけるのは容易ではありません。“決算書”と言っていますが、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュフロー計算書、注記表など複数の帳票によって成り立っています。さらに申告書を加えると、資料は膨大になります。

新入社員：すみません、メモが追いつきませんでした…。どうしてそんなに複数の帳票に分かれているんですか？

先輩社員：集計期間やタイミング、目的がそれぞれ異なるためです。例えば、家計簿をつけていますか？

新入社員：いえ、お金の管理はズボラでして…。でも社会人になったので、きっちりつけていこうと思っています！

先輩社員：良い心がけです。家計簿でいうと、どれだけ今月使ったかと、今いくらお金が残っているかがわかりやすくなりますよね。これが会社になると、何に使ったのかをグループに分けて集計したり、現金以外にいくら財産があるかを計算したりしなければなりません。そうやって、膨大な情報を誰でもわかるようにまとめたものが決算書です。

新入社員：誰でもわかるように、ですか？

先輩社員：はい。決算書を作成する時には守るべきルールがあります。会計基準といいますが、これはまた今度お話しします。すべての会社が同じルールで資料を作成していると、読み手にとってはどんな良いことがあるでしょう？

新入社員：見比べやすいです！

先輩社員：そうです。最初に言ったとおり決算書は会社の成績表ですから、比較できないと善し悪しがわかりません。

新入社員：決算書があれば良い会社か、悪い会社か、わかつちゃうんですね。

先輩社員：ところが、決算書だけではわからないこともたくさんあります。就職活動の時に、会社のどんなところをみていましたか？

新入社員：あつ、会社の雰囲気や、どのような人が社長なのかを重視していました。それは決算書を見てもわかりませんよね…

先輩社員：そういうことです。決算書などから把握できる数字の情報を定量情報、今話したような数値以外の情報を定性情報と言いますのであわせて覚えておいてください。

新入社員：定量と定性ですね。塩と砂糖をよく間違えるので、これは逆に覚えないように気をつけます！

<ポイントの整理>

- ①決算書には、「貸借対照表」、「損益計算書」、「株主資本等変動計算書」、「キャッシュフロー計算書」、「注記表」など複数の帳票が存在する。
- ②決算書等から把握できる情報を「定量情報」。数値以外の情報を「定性情報」という。

#02 : 損益計算書と貸借対照表

先輩社員 : 決算書の中でも根幹と言える二帳票があります。貸借対照表と損益計算書になりますが、見聞きしたことがありますか？

新入社員 : 『たいしゃく』対照表と呼ぶのですね…。確か貸借対照表には、現金や社有の土地、借金などの金額が記載されていると何かの本で読みました。

先輩社員 : そうですね。ゆくゆく、細かな内容について説明していきますが、今回はおおまかなイメージを掴んでもらえば十分です。また、貸借対照表は冒頭に『令和 5 年 3 月 3 1 日現在』といった感じで、決算期末の一時点の情報であることが示されています。

新入社員 : 決算書は、必ず期末時点で作成されるものなののでしょうか？

先輩社員 : そうですね。中小零細企業でも必ず税務申告する必要がありますので、一会計期間つまり基本的には一年ごとに作成されます。ただ、よりタイムリーな情報提供をするため、上場企業の中間期や四半期報告といった形で、決算期間の途中で作成されることもあります。これは、損益計算書も同じですね。

新入社員 : 損益計算書は一番上に売上高がきていて、一番下に利益があるものですよね？ 私には損益計算書のほうがイメージしやすいです。

先輩社員 : 確かに、一年間の売上やそれを獲得するために発生したコストをまとめたものですので、どちらかという損益計算書の方が理解しやすいでしょう。こちらは『自 令和 4 年 4 月 1 日～至 令和 5 年 3 月 3 1 日』といったように集計期間が示されます。

新入社員 : 作成するタイミングは同じでも、貸借対照表は決算期末の一時点、損益計算書は集計期間一年間という違いがあるのですね。

先輩社員 : そして、その貸借対照表と損益計算書の金額は強く連動しているんですよ。

新入社員 : 一時点と一年の集計期間では全く別ものに見えますが・・・どのように連動しているのですか？

先輩社員 : 一年間の売上とコストを損益計算書で集計して、その結果として、期末にどれだけの資産や負債が残っているかが貸借対照表に計上されます。そして、その翌日から次の期の損益計算書の集計期間が始まりますので、会計的には貸借対照表は損益計算書をつなぐ『連結環』ととえられることもあります。

新入社員 : なるほど！ 損益が赤字続きであれば、コストばかり嵩んで現金が減りますし、場合によっては借金が増えている状態になるわけですね。

先輩社員：そんなイメージです。もう少し細かく話すと、損益計算書の最終的な損益結果である利益が、貸借対照表の純資産の項目に反映していくのですが…これは、次回以降に説明しましょう。このようなことから、二帳票をチェックするときは、どのような点に気をつけたらよいと思いますか？

新入社員：役割が違うので、どちらか一帳票だけ見て判断してはいけない、ということがわかりました。他には『連結環』というキーワードから、決算書はずっと繋がっているという印象を受けました。過去期も確認して企業の趨勢を見極めた方がよさそうですね。

先輩社員：その通りです。大前提として現代では経済が発展して、企業は将来にわたって事業を継続していくことが当たり前になりました。その前提に立つと、損益計算書の結果が赤字でも、財務内容が充実している企業とそうでない企業とでは見え方の印象が大きく変わってくるはずです。特に昨今はコロナの影響で売上が減少しているところも多いですから、その企業が培ってきた財務基盤の善し悪しも大きなポイントになります。

新入社員：貸借対照表は積み上げた結果、ということですね。そうであれば、企業の強み・弱みがつかめそうですね！

<ポイントの整理>

- ①貸借対照表は決算期末＝時点の情報。
- ②損益計算書は一事業年度の期間情報。
- ③損益計算書の結果である利益・損失が貸借対照表に反映される関係により、二つの帳票はつながっている。

～貸借対照表 編～

#03 : 貸借対照表の構造 前編（資産の部）

先輩社員 : 今日は貸借対照表の構造についてお話しします。貸借対照表は一時点の財政状態をあらわしたものでしたよね。ではイメージ図を見てみましょう。大きく左右に分かれていますね。

新入社員 : 確か、借方（かりかた）と貸方（かしかた）というんですよね？どっちがどっちだか、よくわからなくなってしまうんです。

先輩社員 : 簿記・会計を習い始めた人のあるあるですね。ひらがなで借方の「り」をイメージすると、最後に左側にはらっているので左が借方、そして貸方の「し」は右側にはらっているのので右が貸方と私は覚えました。

新入社員 : なるほど、それは面白い覚え方ですね！私も今日から、左・右は卒業します。

先輩社員 : その一步一步が大切です。さて、貸借対照表は借方合計と貸方合計が必ず一致します。

新入社員 : 知ってます！左右が必ず一致してバランスをとっているから、バランスシートと呼ぶんですよね？

先輩社員 : たしかに貸借対照表は英語で Balance Sheet、略して B/S と呼びますが、均衡という意味でのバランスではありません。Balance には残高や差額という意味もあり、会計的には本来そちらの意味から名付けられたものです。

新入社員 : 勘違いしていました…。聞いて良かったです。

先輩社員 : さて、貸借対照表の借方に計上されるのが資産のグループです。これはイメージしやすいかと思います。

新入社員 : そうですね！現金や建物、土地といったものならわかります。まだ、よくわからない科目もありますが…

先輩社員 : 順を追って中身を紹介していきますから、焦らないで大丈夫です。資産はその名の通り、お金そのものや売れそうなものが計上されます。他にも、商品を販売したけど期末時点で回収できていない代金や、ソフトウェアといった無形のものも計上されます。

新入社員 : 上半分が流動資産、下半分が固定資産とありますが、なにが違うのでしょうか。

先輩社員 : 資産は流動資産と固定資産として、営業に深く関連するかどうか、1年以内に現金化するかどうかという観点で区分して表示するルールがあります。それぞれ正常営業循環基準、ワンイヤールールといって、今度説明する負債も同様の考え方で区分していますよ。

新入社員：1年以内に現金化するかどうかはイメージができます。

先輩社員：ワンイヤールールの方はわかりやすいですね。貸したお金で考えてみると、1年以内に返してもらう予定なら流動資産で、1年以内に返してもらう予定ではない分は固定資産に表示します。では、正常営業循環基準は聞いたことはありますか？

新入社員：いえ、聞いたことはありません。ただ、言葉のイメージから、普段の営業で取引するときに使う科目ということでしょうか？

先輩社員：なかなかいい線行っていますよ！正常な営業サイクル、例えば商品を仕入れてきて残った在庫、それを売って入金待ちとなっている債権は、入金予定時期に関係なく流動資産に分類されます。

新入社員：正常な・・・ということは異常なものもあるんですか？

先輩社員：その通り。正常な営業サイクルから外れてしまったものとして、経営破綻や実質的にそのような状態の会社に対する債権があります。破産債権、更正債権と呼びますが、これらは正常営業循環基準ではなく、ワンイヤールールに照らして流動資産と固定資産どちらに表示するかを決めます。

新入社員：まずは正常営業循環基準、次にワンイヤールールで考えるということですね。流動資産と固定資産の区分がよくわかりました！

<ポイントの整理>

- ①貸借対照表には借方と貸方があり、左右の合計が必ず一致する。
- ②資産・負債ともに正常営業循環基準とワンイヤールールによって、流動と固定に区分される。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
	×××	評価・換算差額等	×××

#04：貸借対照表の構造 後編（負債の部・純資産の部）

先輩社員：では、ここからは貸借対照表の貸方について話していきたいと思います。貸方は負債と純資産のグループに分かれています。

新入社員：負債はわかります。銀行から借りたお金などが計上されているんですね。

先輩社員：そうですね。他にも商品を仕入れたけど、期末にまだ払っていない債務も計上されます。前回お話しした資産と同じように、負債も『流動負債』と『固定負債』に区分されます。

新入社員：正常営業循環基準とワンイヤールールでしたね。右下の純資産というのがいまいわかりませんが、ここが重要だと聞いたことがあります。

先輩社員：まず貸借対照表の構造をかなりざっくりお話しすると、借方は会社の持っている資産、貸方は調達手段を表しています。負債はいつか返さなければならない調達手段だとすると、純資産は返済義務のない自分のお金といったところです。

新入社員：そういえば、負債は『他人資本』、純資産は『自己資本』とも呼ぶと聞いたことがあります！

先輩社員：そうです。では、調達手段として負債と純資産のどちらが多い方が安心できるでしょうか？

新入社員：やはり借金の少ない会社、つまり純資産が多い方が盤石なイメージです。

先輩社員：そうですね。資産合計のうち、純資産の割合がどれだけあるかを示す指標に『自己資本比率』というものがあります。自己資本比率が高ければ高いほど安定性・安全性が高いと判断できます。最重要分析比率なので、よく覚えておきましょう。

新入社員：わかりました。ところで純資産はどうやれば増やすことができるんですか？

先輩社員：純資産の背景としては、まず出資した株主の存在があります。株主が出資したお金は純資産のなかの資本金といった科目に計上されます。

新入社員：もし会社が倒産しても株主に出資したお金を返す必要がないので、返済する義務が無い調達手段という訳ですね。

先輩社員：それから以前、損益計算書と貸借対照表は強く連動している(※)と話しましたが、覚えているでしょうか。

※財務会計のイロハのイ#02：損益計算書と貸借対照表

新入社員：はい。一年間の売上とコストを損益計算書で集計して、その結果として、期末にどれだけの資産や負債が残っているかが貸借対照表に計上されるというお話しでした。

先輩社員：その通り！損益計算書で計算した利益は、純資産に積み増されていくんです。純資産科目の中に『利益剰余金』、さらにその中に『繰越利益剰余金』という科目があり、最終的に利益が出ると、この『繰越利益剰余金』が増えて純資産が増大していきます。

新入社員：会社が自分で稼いだものなので、これも返済する義務が無い調達手段ということですね。

先輩社員：利益をしっかりと出すということは、自己資本を増強し、会社の信用を強化することに繋がるということです。反対に、赤字が続くとその逆になりますが、その話は改めて紹介します。

<ポイントの整理>

- ①自己資本比率は資産合計（総資本）のうち、純資産の割合を示す指標で、これが高いほど安全性・安定性が高い企業と言える。
- ②損益計算書で計算された利益は、貸借対照表の純資産に積み増されていく。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
	×××	評価・換算差額等	×××

#05：流動資産 前編（当座資産）

先輩社員：さて、前回までは貸借対照表のざっくりとした構造を話してきました。

新入社員：大きく左の借方に資産、右側の貸方に負債と純資産が計上されている、という構造でしたよね。

先輩社員：バッチリですね。頭の中でイメージが描けるようになってきたでしょうか。そして、今回からは各論的に貸借対照表を掘り下げていこうと思います。今日は資産の一番左上、流動資産のうち当座資産と呼ばれるグループについて説明していきましょう。

新入社員：その中には現金や預金も含まれているんですよね？でも、当座資産という言葉はあまり聞いたことがありませんね・・・

先輩社員：確かに普段の生活の中では登場しませんが、貸借対照表分析をする上では欠かせない範囲と言えるでしょう。当座資産は現預金に加えて、容易に換金可能な資産を指します。

新入社員：容易に換金できる、ということは上場企業の株式なんかも含まれるのでしょうか？

先輩社員：そうですね。具体的に当座資産の中身を列挙すると・・・、現金・預金や受取手形、売掛金の営業債権、また有価証券なども含まれます。この流動資産に計上される有価証券は、主に売買して利益を上げることが目的として保有されるものとなりますね。

新入社員：やはり、資産の中で当座資産が占める比率が高い方が良いのでしょうか？

先輩社員：基本的にはそうですね。短期的な債務支払能力を見極める当座比率という分析指標があります。これは当座資産の流動負債に対する割合を示すものです。一般的に100%以上、つまり流動負債以上の当座資産を有しているのが望ましいとされていますね。

新入社員：流動資産と流動負債を比較した流動比率というのは聞いたことがありますが、当座比率はより狭い範囲である当座資産に絞った指標ということですね。

先輩社員：そうですね。ちなみに、流動比率は一般的に200%以上が好ましいと言われますが、不良債権や架空資産といった粉飾決算はここから見抜けませんし、より精緻な分析をするのであれば、現預金のみに着目した現預金手持日数や月商比および売上債権回転期間に踏み込んで把握すべきでしょう。

新入社員：その、回転期間というのもしか月商比のことを指すんですよね？

先輩社員：正解です。月商と比較する手法はとても有効なので、是非覚えておいてください。

新入社員：現預金についても、具体的にどのくらい持っていた方が良い、という目安はあるのでしょうか？

先輩社員：一般的には月商の1カ月分以上は欲しいところですが、ケースによっては期末に親会社に現預金を預けているなど、何かしら事情があるのかもしれませんが、ゆくゆく説明しますが、特に現預金についてはキャッシュフロー計算書を確認したいところですね。

新入社員：売上債権回転期間というのは、売掛金や受取手形を合算した月商比のことですよね？これは、少ない方が良いのでしょうか？

先輩社員：いずれもその通りです。売上債権回転期間が短いということは、つまり、滞留している売上債権が少なく、早く現金化できている、と評価できますからね。一方で、手形の割引や裏書はどのくらいやっているのか、と深く見ていくのがプロの財務分析ですが、今日はここまでしておきましょう。

新入社員：資産の一番はじめから、重要ポイントがたくさん出てきましたね。忘れないように、きっちり復習して次に進みたいと思います。

<ポイントの整理>

- ①当座資産とは現金・預金に加えて、容易に換金可能な資産のことである。
- ②当座資産の流動負債に対する割合を示す指標を当座比率といい、100%以上が望ましい。

$$\text{※当座比率(\%)} = \text{当座資産} \div \text{流動負債} \times 100$$
- ③流動資産の流動負債に対する割合を示す指標を流動比率といい、200%以上が望ましい。

$$\text{※流動比率(\%)} = \text{流動資産} \div \text{流動負債} \times 100$$
- ④より精緻な分析には、現預金の月商比や売上債権回転期間の把握をすべきである。

$$\text{※現預金月商比率(月)} = \text{現預金} \div \text{月商}$$

$$\text{※売上債権回転期間(月)} = \text{売上債権} \div \text{月商}$$

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	xxx
現金・預金	xxx	買掛金	xxx
受取手形	xxx	引当金	xxx
売掛金	xxx	前受金	xxx
有価証券	xxx	仮受金	xxx
固定資産		短期借入金	xxx
商品・製品	xxx	固定負債	
仕掛品	xxx	社債	xxx
原材料	xxx	長期借入金	xxx
貯蔵品	xxx	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	xxx	資本金	xxx
無形固定資産	xxx	資本剰余金	xxx
投資その他の資産	xxx	利益剰余金	xxx
繰延資産		新株予約権	xxx
	xxx	評価・換算差額等	xxx

#06 : 流動資産 後編（棚卸資産）

先輩社員 : さて、今回は当座資産の説明をしましたが、引き続き流動資産の中で今回は棚卸資産を掘り下げていきましょう。

新入社員 : 昔、商店街の雑貨屋でアルバイトをしていたことがありますよ。年末に棚卸をしたことがありますよ。小さい個人経営のお店だったので、在庫を数えて一覧表を手書きで作成した思い出があります。

先輩社員 : それでしたら、棚卸資産のイメージもつきやすいでしょうね。小売店のケースだと、商品在庫がメインでしょうが、製造業や建設業の場合は、原材料のほか、途中経過のものも仕掛品として棚卸資産に計上されます。

新入社員 : 最終的にはいずれ販売される商品や製品になるものも、棚卸資産に含まれるということですね。

先輩社員 : 基本的にはその理解で良いです。ただし、商品のように販売を予定しておらず、販売活動や一般管理活動において短期間に消費する資産、つまり事務用消耗品等も貯蔵品という科目で計上されることがありますので、覚えておきましょう。

新入社員 : そうなんですね。私も小さなお店を手伝っていただけですが、棚卸は大変でした。もっと大きな製造業の棚卸はなかなか想像がつかません……。おそらく今はシステム化されているところが多いと思いますが、カウントを間違えてしまうと資産の額が変わってしまいますよね。

先輩社員 : その通りです。もっと言うと、損益にも影響します。

新入社員 : 棚卸資産が損益に・・・？なぜですか？

先輩社員 : 簡単に説明すると、今期の売上原価を計算する際に、棚卸資産が関係するからです。売上原価は、前期末に残っていた在庫に、今期買った仕入額を足して、そこから、まだ使っていない当期末の在庫を差し引いてコストを把握します。さて、仮に、この期末在庫の数量を意図的に増やすとどうなるでしょうか？

新入社員 : 当期末の在庫はコストから差し引くので売上原価が少なくなって・・・利益が増えます！ということは、それも粉飾の一種ですね。在庫が多すぎる場合は注意した方が良く、というのは聞いたことがありますが、そういうことでしょうか。

先輩社員 : そうです。在庫を実態よりも多く計上すると、コストが少なくなって利益が多くなります。これがいわゆる粉飾です。反対に、在庫を少なくしてコストを大きくする逆粉飾というものもあります。

新入社員 : 逆粉飾なんて、なんのためにするんでしょうか？

先輩社員：利益を少なく申告することになりますので、脱税につながります。少々、損益面の話になりましたが、棚卸資産についても、月商比、つまり棚卸資産回転期間のチェックが重要になります。

新入社員：では棚卸資産回転期間が長期になっていると、粉飾の可能性がある、ということですね？ただ、どのように見極めればいいのでしょうか？

先輩社員：前期以前からの回転期間の動向や、同業種平均などがモノサシになるでしょう。例えば、サービス業でほとんど商品の仕入がないケースでは、棚卸資産の計上は少ないはずです。一方で、不動産売買業においてはかなり多額の土地や建物といったものが棚卸資産になりますので、業種にあった分析が必要です。

新入社員：棚卸資産の分析をするときに、業種以外にも気をつけるべき事がありますか？

先輩社員：例えば、売上が増加している成長期や、期末に多く仕入れをした場合は、一時的に在庫が大きくみえるなど、何か事情があるのかもしれませんが。財務分析においては、決算書や財務分析値だけで結論を出さないようにしましょう。

新入社員：そうですね。常に、なぜこのような分析結果になったのか背景を考えるクセをつけたいと思います。

<ポイントの整理>

①棚卸資産についても月商比としての棚卸資産回転期間のチェックが重要である。

※棚卸資産回転期間 = 棚卸資産 ÷ 月商

②棚卸資産回転期間が長期の場合は、その背景・要因の把握につとめる。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
	×××	評価・換算差額等	×××

#07：固定資産 前編（有形固定資産）

先輩社員：次は貸借対照表の左下のグループ、固定資産を見ていきましょう。その中でも、イメージしやすい有形固定資産です。

新入社員：土地や建物、車や機械といったものが計上されるグループですね。いずれも高価なものばかりのイメージです。

先輩社員：そうですね。他の具体例を挙げていくと、建物附属設備や構築物、船舶や航空機、工具・器具・備品といったものがあります。以前、流動資産と固定資産を分けるルールとして、正常営業循環基準とワンイヤールールを説明したのを覚えていますか？

新入社員：思い出しました！確かに、すぐに現金化するようなものではなくて、長く使っていくモノのグループなんですね。

先輩社員：おおむねその理解で良いでしょう。長く使うモノではありますが、有形固定資産のすべてが、価値を保ちつづけるものではありません。簿記・会計の中でも重要な考え方の一つに減価償却があります。使っていくうちに、また時間の経過に応じて徐々に費用化していくというものです。

新入社員：買ったばかりの新車は価値があるけれど、使っていくうちに価値が減少していくというものですよね。貸借対照表上にはまず計上されて、それらが少しずつ損益計算書の費用になっていくのは、帳票がつながっているイメージが湧きます。そうすると、貸借対照表には期末時点での価値を計上するのでしょうか？

先輩社員：そうです。期末までに計上した償却費の合計を減価償却累計額といいます。また、決算書の表示方法には、購入したときの取得原価から減価償却累計額を差し引いた純額を表示する直接法と、取得原価の下に減価償却累計額をマイナスで併記する間接法の2つがあります。

新入社員：なるほど。でも、直接法だと当初はどのくらいの価値だったのかわからなくなっちゃいますね。

先輩社員：会計ルールでは、直接法の場合は注記として減価償却累計額を示すことになっています。極力、決算書本表以外もチェックしたいところですね。

新入社員：そうでした、決算書は本表だけではなく注記表もあるんですね。気をつけたいと思います。ところで、最終的にどの有形固定資産も価値がゼロになるんですよね？

先輩社員：いえいえ、減価償却しない資産も存在しますよ。例えば土地がそうです。また、建設途中の建物等の建設仮勘定という科目も、まだ使い始めていけませんので償却しません。こういったものを、非償却性資産と呼びます。逆に建物や機械、工具・器具・備品といったものは償却性資産ですね。

新入社員：逆に土地といったものは値上がりもしそうですが、その場合は貸借対照表上の金額も修正するのでしょうか？

先輩社員：詳しい説明は省きますが、過去に時限立法として土地を再評価して、その差額を純資産に計上するという動きもありました。ですが、原則は購入価額のままと決まりました。土地を売ってお金を得たら、利益が確定しますが、持っているだけの場合は未実現利益といってしまう含み益の状態になります。

新入社員：それは面白いですね！でも土地以外の償却性資産も、物理的なモノが残っていれば、帳簿上はゼロ円でも、利用価値が完全にゼロになるわけではないですね。

先輩社員：なかなか良い着眼点です。でも処分するのにお金がかなりかかるケースもあります。ゆくゆく、この話も出てくると思いますので、覚えておいてください。

新入社員：固定資産に入ってから、より一層、計上されている金額そのままを鵜呑みにするのは良くないというのがわかってきました。

<ポイントの整理>

- ①有形固定資産の計上方法には、取得原価から減価償却累計額を控除した後の金額を記載する直接法と、その両方を併記する間接法がある。
- ②時間の経過や使用により価値が減少する建物や機械などは償却性資産となるが、価値が減少しない土地などを非償却性資産といい、減価償却を行わない。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#08 : 固定資産 中編（無形固定資産）

先輩社員 : さて、引き続き固定資産の部を見ていきますが、次は無形固定資産です。その名の通り、実体のない資産のグループになります。

新入社員 : ソフトウェアなどが計上されるんですね？ プロ向けのソフトだと、何十万もするものがあって驚きますよね。

先輩社員 : オーダーメイドの基幹ソフトなんかですと、数千万円になるものもありますよ。そういったものも資産に計上し、耐用年数に応じて償却していきます。ちなみに、有形固定資産と異なり、貸借対照表への計上は償却額を差し引いた後の直接法しか認められていません。

新入社員 : そうなんですね。固定資産を見るときに注目してみます。他にどのような無形固定資産科目があるのでしょうか？

先輩社員 : 無形固定資産に計上されるものは、他に特許権や商標権、意匠権、借地借家権といった法律上の権利もあります。また、のれんという科目が多額に計上されることもあり、要注目です。

新入社員 : のれん・・・ですか？ 为什么呢？ 定食屋さんをくぐるときに掛けてあるのれんが思い浮かびました。

先輩社員 : そうです、その『のれん』が語源の科目です。のれんは、以前は営業権とも呼ばれていました。超過収益力といって、ごくカンタンにいってしまうとお店のブランド力のようなイメージでしょうか。

新入社員 : それは面白いですね！ 高級ブランドだとのれんの計上額が大きいのでしょうか？ そもそも、どのように金額を見積もるのかも思い浮かびません。

先輩社員 : 自社はこれだけのブランド力があるから、100 億ののれんを計上します、といったものは認められません。こういったパターンは自己創設ののれんと呼ばれます。そして、のれんが計上されるのは、M & A などによって他社を購入したときとなります。

新入社員 : 買った会社の購入額が計上されるのでしょうか？

先輩社員 : いえいえ、購入先の会社も資産や負債を持っていますよね。仮に、その差額の純資産をその会社の価格と考えたとき、それ以上の金額を出して買った場合の差額がのれんになる、というイメージです。

新入社員 : なるほど！ 確かに、計上されていた金額以上の価値、ということですね。のれんも償却するんですね？

先輩社員 : そこなんですが、ブランド価値って時の経過によって減るのでしょうか？ それとも、逆に価値が上がるかもしれませんよね？

新入社員：なんだかわからなくなってきましたが・・・のれんも土地と同じように、非償却性資産なんですか？

先輩社員：日本の会計基準では、のれんは 20 年以内で定期的に償却するルールですが、国際会計基準では非償却とされています。ここは、のれんに対する考え方の違いが会計基準に出ているのですね。今日はちょっと踏み込んだ話題になってしまいましたね。

新入社員：確かに難しい印象ですが、そういったものも資産として計上されると知り、驚きました。決算書の面白さが、少しずつわかってきた気がします。

先輩社員：いいですね。ぜひ、気になる企業があれば調べて決算書を見てみてください。上場企業であれば、誰でも決算書をネット上から見られますから、どんな資産が計上されているかに注目してみると面白いかもしれませんよ。

<ポイントの整理>

- ①無形固定資産の計上方法は、有形固定資産と異なり、取得原価から減価償却累計額を控除した後の金額を記載する直接法のみが認められている。
- ②超過収益力を意味するのれんは、日本基準では償却されるが、国際会計基準では非償却の科目である。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
	×××	評価・換算差額等	×××

#09 : 固定資産 後編（投資その他の資産）

先輩社員 : さて、固定資産についても有形、無形と確認してきました。もう一つグループがあるので確認しましょう。

新入社員 : そうなんですね。やはり固定資産の分類なので、すぐに現金化するようなものとは違うんですね？

先輩社員 : はい。投資その他の資産というグループで、投資目的の財貨や他の会社等に対する1年を超える長期の貸付金などで、これまで話した有形固定資産や無形固定資産に属さないものが計上されます。

新入社員 : 確か有価証券は当座資産の中に出てきた記憶があるのですが、こちらに計上されるケースもあるということでしょうか？

先輩社員 : よく覚えていましたね！そうです。有価証券は、その保有目的によって計上されるグループが変わってくる、という会計ルールがあります。当座資産の中に計上される有価証券は、短期の売買目的のものになります。では、投資その他の資産に計上されるのはどのようなケースだと思いますか？

新入社員 : ワンイヤールールのことを考えると、1年以内に売買しないような、長期で保有しようと考えている株式等でしょうか？

先輩社員 : 正解です。特に満期まで保有する意図がある社債等の債権を、満期保有目的債権と言います。その他にも、子会社株式や関連会社株式といった、当面売却することではなく、他の会社を支配または、影響力を及ぼす目的で保有している株式も投資その他の資産に計上されます。

新入社員 : 社債と聞くと、資金調達のために発行する負債科目をイメージしますが、購入した場合は債権として資産勘定になるんですね。ちなみに、どうするか迷っている株式があったときはどうするのでしょうか？

先輩社員 : 明確に短期で売買する目的や、子会社株式のような支配の目的がなければ、その他有価証券として投資その他の資産に計上されます。また、売りたくても売れない、つまり上場されていない株式もこちらに計上されることになります。決算書上の勘定科目は投資有価証券という名称になることが一般的です。

新入社員 : 目的が途中で変わったら振り替えるんですね！

先輩社員 : そうなりますが、会計ルールまた税務の観点からも保有目的の区分を変えるのは正当な理由がなければダメです。この考え方は、他の適用している会計方針などもそうで、その会社が勝手気ままにコロコロ変えられては困りますからね。

新入社員 : 確かにそうですね。每期流動比率が大きく増減するなど、分析もわからなくなってしまいます。

先輩社員：それと、この投資その他の資産で忘れて欲しくないのが破産更正債権等や長期の貸付金の存在です。

新入社員：破産更正債権等は確かに資産価値がなさそうですね。でも貸付金などにも注意すべきなのではないでしょうか？

先輩社員：破産更正債権等は、通常は貸倒引当金を設定されることにより簿価に計上される金額が小さくなっていると思いますが、貸付金は、例えば赤字続きのグループ会社に貸し付けているお金だと、必ずしも返ってくる保証はありませんよ。もちろん、貸付金そのものが悪い、というわけではなく、その中身の見極めが重要になってきます。

新入社員：なるほど。長期滞留している債権ではないか、といった着眼点ですね。以前、月商でチェックする方法を教えてくださいましたので、多額の貸付金が計上されているときは気をつけたいと思います。

<ポイントの整理>

- ①有価証券は保有目的に応じて計上区分が異なる。
- ②投資その他の資産に計上される有価証券は、満期保有目的債権と子会社・関連会社株式、また、その他有価証券である。
- ③破産更正債権等や長期滞留している貸付金などは、その中身に注意する。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#10：繰延資産

新入社員：投資その他の資産まで説明してもらいましたので、次は貸借対照表の負債の部でしょうか？

先輩社員：流動資産、固定資産と見てきましたが、もう一つ資産のグループとして繰延資産が残っています。今回はこの項目について掘り下げておきましょう。

新入社員：繰延資産ですか？はじめて聞きましたが、そんな資産があるんですね？

先輩社員：資産とありますが、本来は費用としての性質をもっています。ですが、将来にわたって効果が期待されることから、資産にカテゴリーされる科目となります。お金を払った期だけではなく、翌期以降に費用化していく考え方は、会計原則の『費用収益対応の原則』によるものです。

新入社員：なんだか難しそうなキーワードが出てきました…

先輩社員：このレクチャーでは、会計原則までは踏み込んで説明しませんが、しっかり収益と費用を対応させることで、きちんと経営成績である損益計算書を作りましょう、というイメージで良いです。

新入社員：なるほど。固定資産の減価償却費のようなものですね。でも、その固定資産と繰延資産の違いは何なのでしょう？

先輩社員：そうですね。徐々に費用化して損益計算書に計上していく流れは同じですが、固定資産と違って性質が費用ですので、繰延資産を売却するようなことはできません。また、基本的には計上される科目が定められています。

新入社員：具体的にどのような科目があるのでしょうか？ここまで話をきいても、あまりイメージがわかりません。

先輩社員：無理もないですね。科目は『創立費』『開業費』『開発費』『株式交付費』『社債発行費』です。このうち、例えば『創立費』は設立登記までに要した費用ですので、每期計上されるようなものでもありません。『株式交付費』『社債発行費』あたりは字面でなんとなくイメージできるかもしれませんが、どちらかというとなりな科目と言えるでしょう。

新入社員：繰延資産が計上されているような決算書を見た記憶が無かったのですが、確かにどの科目も『費』とついていますね。

先輩社員：そうですね。ですので、償却していくことでいずれ資産から無くなる科目で、直接法で計上表示されます。

新入社員：無形固定資産と同じですね！

先輩社員：よく覚えていましたね。なお、この繰延資産について、本来は償却によって減っていく項目ですが、年々増えているような動きがあれば、注意したいところです。本来は繰延資産として認められない費用科目を振り替えてしまっている可能性もあります。あまり見かけない繰延資産だからこそ、このようなポイントを見落とさないようにしましょう。

新入社員：貸借対照表は期末時点の状況ですから、経年比較が重要ですよ。また、中身がよくわからない繰延資産科目が多額にあれば注意したいと思います。私も理解が進んできた気がします。

先輩社員：いいですね。財務分析は、単純に分析指標の計算方法や意味がわかっているだけでは対処できません。まずは、決算書の中身への理解を深めてもらって、ゆくゆくはいろんな分析方法も紹介したいと思います。

<ポイントの整理>

- ①繰延資産とは、本来は費用だが、将来にわたってその効果が期待されるため、資産に計上される科目である。
- ②費用が繰延資産として次期以降に繰り延べられる根拠は費用収益対応の原則による。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産	×××	新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#11：負債の部 前編

先輩社員：では、今回からは貸借対照表の右上のグループ、『負債の部』について説明していきます。

新入社員：貸借対照表の右下のグループは『純資産』で、いずれも、調達手段なんですよ。

先輩社員：そうです。また、負債の部も資産の部と同じように、流動と固定に分けられます。この意味はわかりますよね？

新入社員：はい。おおむね1年以内にどの程度の支払いが発生するのか、また、流動資産とのバランスを見る際にわかりやすくするためです。ちなみに流動と固定の区分についてですが、負債の場合、1年以内に返済予定の『短期借入金』は流動に、1年を超えて返済予定の『長期借入金』は固定に分類されるようなイメージで良いのでしょうか？

先輩社員：そうですね。細かい話ですが『長期借入金』のうち1年以内に返済予定の部分は『1年以内返済長期借入金』といった科目で流動負債に計上されます。この考え方は『社債』や『リース債務』といった科目も同じですので覚えておきましょう。ちなみに、以前紹介した流動比率ですが、どの程度が理想的か覚えていますか？

新入社員：理想的な流動比率は…、たしか一般的に200%以上でしたよね？

先輩社員：正解です。ただ、資産の中に架空のものや、資産価値のないものが含まれるケースもあるので、鵜呑みにしないように、とお話ししましたね。

新入社員：負債側の粉飾、というパターンもあるのでしょうか？

先輩社員：残念ながら存在します。例えば多額の負債を抱えている会社が、実態を隠すために借金の一部を簿外にする可能性がありますね。なんとか金融機関から資金を引き出したくて、その場凌ぎの粉飾に手を染めることもあります。

新入社員：見極めが難しそうですが、どういった点に注意すれば良いのでしょうか？

先輩社員：例えば、かなり多くの銀行から借入をしている、いわゆる多行取引のケースや、過去から連続で決算書を見て不自然な点がないか、また、可能であればキャッシュフロー計算書を確認するなど、総合的に判断しなければなりません。粉飾については改めて取り上げたいと思いますので、まずは基礎固めを意識していきましょう。

新入社員：そうします！負債はもちろんお金を返さなければいけない科目ですから、少ない方が良いんですよね？

先輩社員：基本的な考え方はそうですね。資金繰りの観点からは営業債権よりも営業債務の方が多いと、余裕があるという見方もできますが、今回は割愛しますね。

新入社員：負債の部には、営業債務である買掛金や支払手形および他には金融機関からの借入金が計上されるイメージですが、あっていますか？

先輩社員：今、挙げてもらった科目に対してはきちんとお金を払う必要がありますが、このほかに、負債の部には引当金という科目が計上されることがあります。これは、将来、費用や損失として計上される可能性が高いものを見積もって計上した科目、と言えるでしょう。

新入社員：引当金という言葉はなんとなく耳にしたことがありますが、具体的にはどのようなものが負債に計上されるのでしょうか？

先輩社員：例えば、修繕引当金あたりはわかりやすいでしょう。将来の大規模な修繕に備えて計上されることがあります。

新入社員：その言葉は聞いたことがあります！マンションに住んでいると毎年、住人から少しずつ積み立てられますよね。法人の負債科目にもあるんですね。

先輩社員：他にも様々な引当金科目がありますが、今回はイメージをつかんでもらえばOKです。

<ポイントの整理>

- ①負債の部にも、流動・固定の区分がある。
- ②負債の部に計上される引当金とは、将来、費用または損失となる可能性が高い科目を指す。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	
有価証券	×××	仮受金	
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××		
固定資産		純資産の部	
有形固定資産	×××	株主資本	
無形固定資産	×××	資本金	×××
投資その他の資産	×××	資本剰余金	×××
繰延資産	×××	利益剰余金	×××
		新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#12：負債の部 後編

先輩社員：では引き続き、もう少し『負債の部』について掘り下げていきましょう。今回は、営業債務と借入金、引当金といった負債について紹介しましたが、商品やサービスの提供前にお金を受け取ったときに計上される『前受金』も負債の科目となります。

新入社員：支払義務が残っているというわけではなく、この場合は商品等を提供する義務が残っている科目ですね。

先輩社員：そうなります。また、『前受金』は営業取引に関わるもので、それ以外の一定の契約に従い、継続して役務提供を行うケースにおいて、まだ提供していない部分に対する支払を受けたものは『前受収益』といった科目になります。

新入社員：『前受金』はイメージできるのですが、『前受収益』はどのようなケースで発生するのでしょうか？

先輩社員：例えば、会社の敷地の一部を駐車場として貸しているとしましょう。月末に賃料をもらいますが、それが1日～31日ではなく、15日締めだった場合をイメージしてみてください。

新入社員：わかってきました。翌月の1日～15日までの分は、さきにお金をもらっている、ということになりますね。この部分はまだ収益に計上してはいけない、ということですね！

先輩社員：正解です。一方で、決算月の16日～月末までが『不動産賃借料』などとして収益に計上されることで、切り分けがされるということです。きちんと期間損益計算を行うための考え方ですね。ちなみに、似たような負債科目に『仮受金』というものがあります。これは、なぜ入金されたのかわからないといったケースに用いる一時的な科目で、決算のタイミングで然るべき科目に修正されるべきものです。

新入社員：修正されているべき『仮受金』が決算書に多額に計上されていれば、その理由や背景を確認したい注意すべきケース、ということですね。覚えておきます。

先輩社員：さて、前回お話しした引当金は、将来発生しそうな費用や損失を先に計上する科目でしたよね。今回の『前受収益』とあわせて、なんとなく損益計算書と貸借対照表が関連している、というイメージがわいてきたのではないのでしょうか？このような着眼点を鍛えていくと、帳票間のつながりがわかってきて、決算書を見る力が伸びていきます。

新入社員：それぞれの科目を見るときに、今後は収益になるのか、費用になるのか、はたまた現預金の増減か、など考えていくとその会社の今後少し見えてきそうですね。

先輩社員：その通りです。では少し時間があまりましたので、もう一つ『預り金』という負債科目についても紹介しておきましょう。

新入社員：その名の通り、誰かからお金を一時的に預かっている科目ですよね？どんなものがあるのでしょうか？

先輩社員：毎月、会社が従業員から預かっているものがありますよ。ご自身の給与明細を思い出してください。

新入社員：確かに！私の給料から源泉徴収された所得税などが引かれています。会社が代わりに納付するので『預り金』として負債に計上されるんですね。

先輩社員：勘定科目はわかりやすいように『従業員預り金』などで表示されるケースもあります。

新入社員：おおむね負債の部のイメージもつかめてきて、貸借対照表がわかってきた気がします。ですが、次回からは一番苦手の『純資産の部』でしょうか…。耳慣れない科目が多くて、いつもどのように見れば良いかわからなくなります。

先輩社員：全体像をお話したときに、負債は『他人資本』、純資産は『自己資本』というキーワードが出てきましたよね。あまり難しく捉えずに、まずは純資産の部は金額が大きければ良いグループというのを念頭に置いて話をきいてもらえると良いでしょう。引き続き、頑張ってください！

<ポイントの整理>

- ①商品やサービス提供前に支払いを受けた場合は前受金が負債に計上される。
- ②一定の契約に従い、継続して役務の提供を行う場合、いまだ提供していない役務に対し支払を受けた場合は前受収益が負債に計上される。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引出金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#13：純資産の部 前編

先輩社員：さて、貸借対照表も大詰め、最後の『純資産の部』に入ります。ここだけで専門書が出ているくらい、論点が多いポイントになりますが、まずは初心者目線で説明していきます。

新入社員：お願いします。貸借対照表の中でも純資産の部は重要で、いの一番に覚えさせられたのは『自己資本比率』でした。この値が高い方が良い会社、ということはぼんやり知っています。

先輩社員：そうですね。算式はざっくり言ってしまうと『純資産÷総資産×100』となりますが、この純資産が自己資本と呼ばれることから、自己資本比率という呼び名になっていますね。

新入社員：単純にこの値が高いと、自己資本、つまり返済義務のない調達手段で資産を買っているということですよね？

先輩社員：おおむね、そう言って差し支えないでしょう。自己資本比率は『安全性・安定性』を見極める指標と言えます。

新入社員：ただ、純資産の部はナントカ準備金とか、耳慣れない科目ばかりでよくわからないんですよね。

先輩社員：あせらず順番にいきましょう。純資産の部もいくつかに分けられるのですが、本丸は『株主資本』となります。今回はこの中身を説明していきます。大きく分けて『資本金』『資本剰余金』『利益剰余金』の3つです。

新入社員：資本金は設立したときに株主から振り込まれるお金ですよね。増資や減資で動きますが、每期同じ金額が計上されているイメージです。

先輩社員：そうですね。資本金は増減があれば登記しなければいけません。資本金をはじめとする純資産が減ってしまうと、お金を貸している債権者からすれば、お金が返ってくるか不安になりますよね？なので、増減資を行うためには所定の手続きが必要なんです。

新入社員：経営者としても、お金を借りるときや、お客さんから良いイメージを持ってもらうために自己資本比率を高く保ちたいですよね。1円から会社を設立できるんですけど、大きな会社ほど資本金も大きいんですよね。

先輩社員：続けて資本剰余金です。ちょっと難しく聞こえるかもしれませんが、これは資本取引から生じた剰余金と説明され、ごく簡単に説明すると資本金としなかった元手と言えるでしょう。ただ資本金のような登記は必要ないため、相対的に動かしやすい科目と言えますが、根底は資本を充実させ、厚みを持たせることが求められています。

新入社員：なるほど。確かに『資本』についていますね。では利益剰余金は、自社で儲けたお金が貯まったものということですか？

先輩社員：そうですね。もう少し踏み込んで説明すると、資本取引から生じたものが資本剰余金、損益取引から生じたものが利益剰余金と分けられています。そのため、利益剰余金については、利益が出れば増え、損失になれば減っていきます。そして通常は、この利益剰余金の科目の一つである『繰越利益剰余金』から株主に配当がされることになります。

新入社員：耳慣れない科目が多いのは確かですが、なんとなく純資産の部の構造がわかってきたような気がします。

先輩社員：初心者の方は、まずはこの程度の切り分けが理解できていれば良いと思います。もう一点、重要なキーワードとして『債務超過』があります。これは聞いたことがあるでしょう。

新入社員：赤字続きの会社で、純資産の部がマイナスになってしまっている状態ですよね。倒産しそうな会社、という印象が強いです。

先輩社員：では、次回はもう少し債務超過についてと、他の純資産項目について取り上げましょう。

<ポイントの整理>

- ①自己資本比率は安全性・安定性を見極める指標であり、 $\text{純資産} \div \text{総資産} \times 100$ で求められる。
- ②純資産の部で重要な株主資本は、大きく資本金・資本剰余金・利益剰余金からなる。

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
当座資産		支払手形	×××
現金・預金	×××	買掛金	×××
受取手形	×××	引当金	×××
売掛金	×××	前受金	×××
有価証券	×××	仮受金	×××
棚卸資産		短期借入金	×××
商品・製品	×××	固定負債	
仕掛品	×××	社債	×××
原材料	×××	長期借入金	×××
貯蔵品	×××	純資産の部	
固定資産		株主資本	
有形固定資産	×××	資本金	×××
無形固定資産	×××	資本剰余金	×××
投資その他の資産	×××	利益剰余金	×××
繰延資産		新株予約権	×××
		評価・換算差額等	×××

#14：純資産の部 後編

先輩社員： 前回、『債務超過』というキーワードが出てきました。純資産の部がマイナスになっており、資産を全部売っても負債を返しきれないような、不健全な財務状態であることは確かですね。

新入社員： 倒産してしまいそうなイメージですが、中小企業の決算書では、よく見かけると聞きます。単純な疑問ですが、そのような状態で会社を続けることは可能なのでしょうか？

先輩社員： 債務超過に陥ったからといって、直ちに借金を全額返済するようなことはありませんし、いきなり銀行取引が停止することはありません。少々踏み込んだ話になりますが、中小企業の場合は、社長が株主であることも多く、一時的に社長個人のお金を会社に入れることで、急場を凌ぐ判断も発生します。

新入社員： 増資をするイメージでしょうか？

先輩社員： 資本金の増加には登記が必要ですので、社長が会社にお金を貸すような形態をとるパターンが多いです。また、この場合は役員借入金という科目などで、金融機関からの借り入れと分けるのが一般的です。

新入社員： なるほど。そして、業績が回復して来たら、役員借入を返済して債務超過をクリアにしていく、ということですね。

先輩社員： そのようなシナリオが理想的ですね。債務超過の決算書を分析するときは、いつから、どのような原因で債務超過となったのかや今後の会社の方針をつかむなどして、より慎重な目線で判断していく必要があります。

新入社員： 初心者の方は難しそうですが、債務超過かどうかや、自己資本比率だけで判断せずに、資産・負債の中身にも目を向けていくように心がけたいです。

先輩社員： 今後、損益計算書についても話していきますが、一帳票の一か所だけで決めつけないよう、俯瞰して企業の分析をする姿勢を忘れないようにしましょう。さて、今回は純資産の部のうち『株主資本』をフォーカスしましたが、残りを簡単に説明していきましょう。一つは『新株予約権』です。

新入社員： その勘定科目も聞いたことがありません……。ですが、科目名から増資につながるのでしょうか？

先輩社員： なかなか良いカンしてますね。新株予約権を持っている人は、それを発行した会社に対し、権利行使によって約束した価格で株式を買うことができます。また、自社の役員や従業員に発行されるものはストック・オプションと呼ばれ、一定条件で権利行使できるインセンティブとしても活用されています。ですが、新株予約権は、権利が行使されないこともある『仮』の状態でもありますので、『株主資本』からは分けられています。

新入社員：ストック・オプションという言葉は、経済新聞で目にした記憶があります。発行する会社としては、純資産の部に計上されるんですね。

先輩社員：最後に『評価・換算差額等』というグループがあります。詳しい説明は省きますが、例えば『その他有価証券』を時価で評価したとき、値上がりしているけど、まだ売って利益を確定させたわけではないので、一時的に、差額をこのグループに計上します。

新入社員：『その他有価証券』は、『投資その他の資産』の説明の時に出てきた科目ですね。確か、有価証券は保有目的に応じて、計上区分が変わるんですよね。

先輩社員：そうです。時価評価の方法といった会計処理も、実は変わってきます。ひとまず、今日は純資産の部が、大きく『株主資本』『新株予約権』『評価・換算差額等』のように分かれている、とイメージを固めてもらえばOKです。

新入社員：わかりました。今日まで貸借対照表の説明をしてもらいましたが、基礎の部分だけでも自分が思っていた以上にたくさんの論点があって驚きました。

先輩社員：そうなんです。決算書の世界って、とっても奥深いでしょ？もちろん、複雑で難しいところもありますが、大枠を掴めば、理解するスピードも速くなっていきますし、それが面白いところだと思います。

<ポイントの整理>

- ①債務超過の企業を分析する際は、どのような原因で債務超過となったのか、また、今後の会社の方針をつかむなどして、より慎重な目線で判断していく必要がある。
- ②純資産の部は、大きく『株主資本』『新株予約権』『評価・換算差額等』からなる。

資産の部		負債の部		
流動資産		流動負債		
当座資産		支払手形		×××
現金・預金	×××	買掛金		×××
受取手形	×××	引当金		×××
売掛金	×××	前受金		×××
有価証券	×××	仮受金		×××
棚卸資産		短期借入金		×××
商品・製品	×××	固定負債		
仕掛品	×××	社債		×××
原材料	×××	長期借入金		×××
貯蔵品	×××			
固定資産		純資産の部		
有形固定資産	×××	株主資本		
無形固定資産	×××	資本金		×××
投資その他の資産	×××	資本剰余金		×××
		利益剰余金		×××
繰延資産		新株予約権		×××
	×××	評価・換算差額等		×××

コラムまとめ Vol.1 <決算書基礎・貸借対照表 編> は以上です。

全国企業財務諸表分析統計

企業の財務リスク管理に欠かせない必須資料！企業評価のための財務分析指標としても最適！

「自社、競合、取引企業を評価しませんか？」

- 全国の調査網を駆使して集めた非公開企業の財務データを含め編集
- 直近事業年度（4月～3月）の財務諸表を分析
- 企業の多面的な分析が可能となる財務比率 56 項目を掲載
- 産業別（大分類）の主要分析値をレーダーチャートで表示
- 与信管理から新規開拓まで多彩なビジネスシーンに対応



お申込み・サービスの詳細は[こちら](#)からご覧いただけます。

2023 年 5 月発行

株式会社帝国データバンク

営業企画部マーケティング課

TEL : 03-5775-3210

Mail : tdb_marketing@mail.tdb.co.jp